

日本国民の品性は蘇生できるか？

----- 新渡戸稲造『武士道』の遺産を蘇生せよ！ -----

● はじめに

この『**美徳冊子2**』は、「人間の品格とは何か？」「人の世の美徳ある自由とは何か？」「人生において、なぜ美徳（道徳）が重要（必要）なのか？」「日本国の美徳（道徳）と他国の美徳（道徳）に、共通項はあるのか否か？」等々を、現代日本国の老若男女の国民の皆様にも再考してもらおうためのきっかけの提供として、**私〔=ブログ作成者〕**が過去の名著の中から道徳（美徳）論・保守（自由）哲学などを引用・抜粋し、若干の解説を加えて、短編冊子として再構成したものである。

私〔=ブログ作成者〕は、この『美徳冊子2』を道徳の義務の重苦しさから逃げることなく、最後まで楽しく読み切った読者の皆様が、人生観（価値観）を僅かでも前向きで良い方向に好転できるきっかけとなることを切に願うものです。

なお、この『美徳冊子2』は、**私〔=ブログ作成者〕**の以前の3つの小冊子（小論）、

① → [『美徳冊子「さあ、自助の精神を取り戻そう」』](#)

②→美德ある自由を生きましょう！

③→真正の保守主義とは何か？

の哲学（論理）を基礎土台とした**続編**という位置づけである。

本論を読み終えた後、なおこれら前3小論を読む興味が残っている方々には、是非読んで頂きたいと思う。

そして、これらの小冊子での論考は、**E・バーク**の保守哲学、**D・ヒューム**の道德哲学、**S・スマイルズ**の美德論、**F・A・ハイエク**の自由主義哲学、**新渡戸稲造**の『武士道』、**中川八洋**（筑波大学名誉教授）の保守主義政治哲学の中を一貫する原理すなわち、「**法の下**の自由」「**美德ある自由**」という**自由主義の原理**を基礎として構築していることを申し添えておく。

また、本論を読んで頂くにあたっての注意事項を以下にまとめておく。

* 引用文（邦訳・現代語訳）に関する注意事項について。

I 引用文中、『品性論』については、Samuel Smiles, "CHARACTER"を**私**〔=**ブログ作成者**〕が邦訳した訳例である。

II また、『自助論』については、（**中村正直**＝訳／**渡部昇一・宮地久子**＝現代語訳 版）から引用させて頂いた。

III さらに、新渡戸稲造『武士道』からの引用は、奈良本辰也訳の三笠書房版を使用している。

IV また、引用文上段に付した「標題」は、サミュエル・スマイルズの原著、中村正直の訳（及び上記の現代語訳版）とは無関係に、**私**〔=**ブログ作成者**〕が独自に付したものである。

V 引用文は原則、 囲いの枠内におさめており、**私**〔=**ブログ作成者**〕の解説や意見等は の枠外に記述した。

Ⅵ 著作からの引用文中の〔 〕内は著者の説明書き、()内は引用箇所前後の関連から、**私**〔=**ブログ作成者**〕が補足したものである。

本論を読むにあたり、読者の皆様には以上の内容を留意頂きたいと思う。

それでは、本論に入ろう。

本 論

1. 武士道の“美德”は 21 世紀の日本国に蘇生できるか？

新渡戸稲造が『武士道』の結び部分において、武士道的美徳の行く末について、「廃墟を超えて蘇生するにちがいない」と述べたのは有名である。

日本国・日本国民から美德と美德教育が消え失せてから、すでに長過ぎる年月が経過したが、はたして 21 世紀現在の日本国・日本国民に武士道的美徳は蘇生できるのだろうか？

読者の皆様が、このような観点から、この『美德冊子 2』を読んで（気軽に眺めて）頂けるなら、著者の最も幸いとするところである。

新渡戸稲造曰く、

守るべき確固たる教義や公式をもたないために、武士道は朝の一陣の風であえなくも散っていく桜の花びらのように、その姿をまったく消してしまうことだろう。

だが、その運命は決して絶滅したのではない。禁欲主義がなくなった、と誰がいうことができよう。制度としては滅んだかもしれない。だが、徳目としては今なお生きているのである。

その精力と活力は人生のさまざまな面で、西洋諸国民の哲学の中に、すべての文明世界の法の中になお感じ取ることができる。

否、人間が自己を向上させようとしてたたかっているところにおいては、精神が肉体を支配するところにおいては、私たちはゼノンの不滅の教訓が作用しているのを見るのである。

武士道は一つの独立した道德の掟としては消滅するかもしれない。しかしそ

の力はこの地上から消え去ることはない。

その武勇と文徳の教訓は解体されるかもしれない。

しかし、その光と栄誉はその廃墟を超えて蘇生するにちがいない。

あの象徴たる桜の花のように、四方の風に吹かれた後、人生を豊かにする芳香を運んで人間を祝福しつづけることだろう。

何世代か後に、武士道の習慣が葬り去られ、その名が忘れ去られるときが来るとしても、「路辺に立ちて眺めやれば」、その香りは遠く離れた、見えない丘から漂ってくるだろう。

（出典：新渡戸稲造『武士道』、三笠書房、190頁）

2. 自由主義的「美德」と全体主義的「悪徳」の峻別がまず重要！

自由とは、他者の恣意的な意志の強制から、個人が独立していることを意味し、個人の自由は国家に**“法の支配”**が確立され、政府および国民が**“法を遵守する”**ことにより達成され、保護されるものである。

つまり、“法の護持”と“法の支配の遵守”によって個人の自由が保護されるのであるから、自由の維持のためには、政府による必要最小限度の“強制力”が必要となることは誰でも理解できよう。

自由とは決して「無制限の自由」、すなわち「自由放任」「放縦（放蕩）」を意味しないのである。

一方、自由主義社会における「美德」とは、個人が自分自身に、より美しく、より高貴に生きるための「義務」を課すことによって、品性を磨くことを意味するから、美德は自由な環境、すなわち個人の自発的意志と自発的行動が許容される環境でしか決して育たないものなのである。

こうして、自由主義社会の個人は自発的意志により美德を鍛錬す

ることで、より「高貴な自由」、より「誇りある自由」を得ることを通じて「自分は何のために生きるか?」、「自分がより善き人生を送るためには何が必要か?」、「世の中でもっと他者と仲良く生きるためにはどうすればよいか?」等々を一生涯に渡り探求し続けるのである。それが、「人が“人として”生きる」という意味である。

それゆえ、美德の教育とは唯一このような目的のために家庭や学校において子供たちに教えられるべきものであり、決して国家（政府や特定の政治政党など）が自己の政治理念に国民を従属させる目的で、特定の政治教義を強制することであってはならないのである。

後者のごとき全体主義的倫理はもはや「美德（善）」とかけ離れ、「美德（善）」と背反する「悪徳」・「悪魔的教義」へと堕するのである。

今日では、ヒットラーやスターリンの全体主義体制の下での人間虐殺の恐怖政治の歴史を回顧すれば、その正しさは自明なことであるのに、この美德と悪徳の峻別が、未だに全く理解できない日本人が多いことには驚くばかりである。

ハイエク曰く、

「目的は手段を正当化する」という原則は、個人主義的倫理では、あらゆる道徳の否定とみなされる。ところが、これに対し、集産主義（全体主義）の倫理では、この原則こそ最高の倫理規範となるのである。首尾一貫した集産主義者にとっては、「全体のための善」に奉仕することであれば、あえてしてはならない行為は何もない。というのも、「全体のための善」こそが、何かなされるべきかの唯一の判断基準であるからだ。

・・・集産主義者の立場に立てば、反対意見の存在を許さずそれをむりやり圧殺することとか、個人個人の生活や幸福を完全に無視することとかは、高次

の目的の達成という基本命題がもたらす、当然で不可欠な帰結にすぎない。集産主義者は自らこれを認めるだろうし、むしろ自分たちの体制は、個人の「利己的な」利益が社会の目的の十分な実現を妨げることを許しているような体制より、はるかに優れているとさえ主張するだろう。こういった考えの源をつくり出したドイツの哲学者たちも同様に、彼らは繰返し、個人的な幸福にむけて努力すること自体が不道徳であり、課せられた義務を遂行することのみが称賛に値する、と述べてきた。

(出典：ハイエク『隷属への道』、春秋社、192～194 頁)

3.〔徳目〕正義と勇気について

3-1. 法の遵守と正義

新渡戸稲造は、主著『武士道』において、「義」とは裏取引や不正な行いを最も忌むしいものとみなす心であると定義した。

また「勇」については、林子平の「勇は義の相手にて裁断の事也。道理に任せて決定して猶予せざる心をいふ也」の言を引いて、「義（正義）」の行動を決断し実行する心のことであるとした。

一方、自由の哲人であるハイエクは、「正義」とは人間の行動の属性であり「正しい行為のルール（の体系）」すなわち「法」を遵守する行為を「正義」と定義した（『ハイエク全集「法と立法と自由」』、春秋社等を参照せよ！）。

ここでは、「法」とは何かについて詳細に論じている余裕はない。

しかし、自由の自生的秩序としての「法」は、人間の恣意的な意思による特定の「命令」とは区別されるものであることだけをハイエクの説明を借りて簡潔に記しておきたいと思う。

ハイエク曰く、

「ノモス〔nomos〕」という言葉は、正しい行為を規定する普遍的ルールをあ

らわすときに用い・・・このルールは将来のいかなる事例に対しても適用されるもので、このルールに規定される客観的な状況はすべての人に平等に適用される。このルールに従ったことにより、特定の状況ではなにかしらの影響が出るかもしれないが、それはここでは一切関係しない。このルールは、個人や組織がそれぞれの目的追求のためにどのような手段（＝行為）を用いていいかを判断することを可能にし、それにより保護されるべき個人の領域を規定する。加えて、人びとの行動が争いになるのを避けることも可能にする。このようなルールは一般的には「抽象的」と呼ばれ、個々の目的とは関係がない。このルールは、同じように抽象的で、目的とは関連性をもたない自生的秩序つまり、コスモス（cosmos）の形成につながる。

これとは対照的に「テシス〔thesis〕」は、特定の人々にのみ適用されるルール、あるいは支配者の目的にかなったルールを指すときに使う。こうした原則も、程度の違いこそあれ、普遍性もあり、さまざまな具体例に適用されるかもしれないが、気づかないうちに、いわゆるルールから特定の命令へと変容していくものである。（個人ではなく）組織つまりタクシス（taxi）を動かすためには必要な道具である。

（出典：『ハイエク全集「政治哲学論集」』、春秋社、207～208 頁）

また、自由の自生的秩序を理解するためには、バーナード・マンデヴィルの中心的主張に関するハイエクの次の解説が理解しやすいかもしれない。

ハイエク曰く、

社会の複雑な秩序の中では（＝秩序に従がって行動すれば）、人間の行為の結果は、彼らが意図したものと極めて異なるということ。諸個人は、利己的であれ利他的であれ、自分の目的を追求して、予想もしなければたぶん知りさえ

もしない、他人に有益な結果を生み出すということ。そして最後に、社会の全秩序とさらには私たちが文化と呼んでいるすべてのものは個人の活動の結果であって、個人の活動は、そうした結果を目的として念頭に置いていないが、しかし、これまた意識的に発明されたのではなく、有益とわかったものが生き残ることで成長した制度や習慣や規則によって、（個人が）そうした目的に役立つように導かれるのだということ。

マンデヴィルが秩序をもった社会の諸構造の自生的成長のすべての古典的な諸事例---法と道徳、言語、市場および貨幣、さらにまた技術的知識の成長---をはじめて展開したのはこのより広い命題の彫琢においてであった。

（出典：F.A.ハイエク『市場・知識・自由』、ミネルヴァ書房、106～107 頁）

（ハイエクさらに曰く、）

私たちは、これらの概念（マンデヴィルの主要概念）---ヒュームがそれを拾いあげて精巧にした最初にして最大の思想家となったのであった---のその後の発展をみるとき、マンデヴィルの貢献が如何に大きかったかを認識する。この発展はもちろん、18 世紀の偉大なスコットランドの道徳哲学者たち、とりわけアダム・スミスとアダム・ファークスンを含んでおり、この後者は「人間の行為の結果ではあるが、人間の設計の結果ではない」云々という文言によって、マンデヴィルの中心問題に最上の簡潔な表現を与えただけでなく、すべての社会理論の課題に最も優れた定義を与えもした。

（出典：同、123～124 頁）

さて、以上のように新渡戸の「義」とハイエクの「正義」を比較したのは「義」と「正義」の共通の基準を明確にするためである。

すなわち、これらの徳目はいずれも「人間の行動の属性」であり、結果の状態には左右されない（無関係である）ということである。

さらに言えば、「義」や「正義」は、その社会で形成された“正しい行動のルール（規則とも掟などとも言う）の体系”=“法”を“遵守する行為”にそれ自体（=手段）にあるということである。

そして、法に従ってどう行動すべきか、すなわち「義」や「正義」を見極めたならば、それを迷わず実行に移す裁断力を「勇」とか「勇氣（勇敢）」というのである。

このように、自由主義の“法”と“正義”の概念を理解しなければ、正義が何かを見失い（例えば熱情や憤怒に流されたりして）、勇氣（勇敢）を振るう方向を見失う可能性が大きいのである。

新渡戸稲造曰く、

義は、もう一つの勇敢（勇氣）という徳行と並ぶ、武士道の双生児である。
（出典：『武士道』、三笠書房、36 頁）

さらに曰く、

勇氣は、義によって発動されるのでなければ、徳行の中に数えられる価値はない。

（出典：同、40 頁）

この格言を肯定的にいいなおすと「勇氣とは正しいことをすることである」となる。

あらゆる種類の危険を冒し、生命を賭して死地に臨むこと---これはしばしば勇猛と同一視され、武器をもつことを職業とする者にあつては、そのような向こう見ずの行為が不当に賞賛されている。

シェイクスピアはそれを「勇猛の私生児」と名付けた。

（出典：同、40 頁）

3-2. 勇気（勇敢）と優しさ（思いやり）

No.1 恐怖心の正体は、大抵の場合、「心の想像の産物」である。

このように、忍耐力と勇気のある精神が人の品性の形成過程において非常に重要であることは明らかであろう。

その精神は人生において有益さの源であるだけでなく、幸福の源でもある。他方で、臆病なこと、ましてや、卑劣な性格であることは最大の不幸の一つである。

賢者が常に言ってきたことは、子供を教育するにおいて目標とすべき第一番目の事柄は、恐怖以上に恐怖すべきものは何もないということを習慣にするように彼らを訓練せよ、ということである。

恐怖心を振り払う習慣は、思いやり、勤勉、学問、あるいは快活さのような、その他のどの習慣とも同様に訓練され得るものであることは疑う余地がない。

心に存在している恐怖の大部分は、（将来）起るかもしれないが、おそらくめったに起こることのない（まだ存在していない）害悪の心象を描き出す想像力の産物にすぎないのである。

このような心の想像によって、現実起きた危険には立ち向かい乗り越える勇気を出せる人の多くが、想像上の危険には無力となって、恐怖心の中に投げ込まれてしまうのである。

それ故に、もし想像力が厳しく生活規律の下で抑制されなければ、我々は中途半端を上回る害悪---すなわち未然に防ぐことにより耐えうる以上の害悪、我々が実際に担える責任能力を超えた害悪---に遭遇することがよくあるのである。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-5）

No.2 勇気を発揮する場面は、大部分、日常生活の中にある！

しかし世の中で必要とされる勇気の大部分は英雄のような勇気ではない。勇気は歴史上重要な活動の舞台のほか、日常生活の中でも示されるだろう。例えばそれは、次のような誰もが知る勇気のことである。

すなわち、それは正直であろうとする勇気---誘惑に耐える勇気---本当のこと（真実・事実）を語る勇気---真に人としてあるべき姿であろうとし、すべきでないことをしない勇気---自分自身の財力の範囲内で誠実に生き、他人の財力に依存して不誠実に生きようとしめない勇気のことである。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-5）

No.3 真実を語らずして苦しむよりも、真実を語ることでその報いを受ける方がましである。

人には真実を愛し真実を語る義務がある。

（16～17 世紀の）イングランド人、ジョン・ピム曰く、「私は真実を語らずして苦しむよりはむしろ真実を語ることでその報いを受けるほうがよい」。

公正かつ十分な考慮をした後、真の確信に至ったならば、その時人はその確信を、あらゆる正当な手段を用いて、行動に移すように努力をすることを正当化できるのだ。

社会の状況と事態の様相によっては、人は正々堂々と自分の意見を述べて他者と対立しなければならない場合がある---そのような場合にそうせず他者に服従する人は、脆弱者であるのみならず罪ある者だと言える。

大悪は、時として、抵抗して闘うしかないものがある。

そのような大悪は泣いて許されるものではなく、戦って倒さねばならないもののなのである。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-5）

「誠」の徳目について新渡戸稲造曰く、

真実性と誠意（真実を述べる勇氣）がなくては、礼は道化芝居か見世物のたぐいにおちいる。

伊達政宗は「度を越えた礼は、もはやまやかしである」と言っている。

「心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらむ」この歌を詠んだ昔の歌人にはポロニウスを超えるものがあつた。

（出典：『武士道』、三笠書房、71 頁）

（新渡戸稲造さらに曰く、）

嘘をつくこと、あるいはごまかしは、等しく臆病とみなされた。武士は自分たちの高い社会的身分が商人や農民よりも、より高い誠の水準を求められていると考えていた。

（出典：同、72 頁）

人は相手への（思いやりの心・配慮）から、礼儀として、「**事実**」を枉げて方便を使うことがある。

しかし、礼儀のために「**真実**」を枉げるならば、それはすでに礼儀ではなく、虚礼・欺瞞である。

これらは、**某 A 新聞社**が拳拳服膺すべき教えではないか？

No.4 高貴で勇敢な者は、不名誉を最も怖れるものである。

高貴で勇敢な人は死よりも不名誉を恐れるものである。

王党派のストラッフォード伯が、タワー・ヒルにある処刑台に向かって歩いている時の、その足取りと態度は、死刑判決を受けた死刑囚のものではなく、むしろ確固たる勝利を手にした軍隊の先頭に立って凱旋する大将のものであつたと言われている。

共和派のジョン・エリオットも同じ処刑台向かって勇敢に歩いて曰く、「こ

の世のすべてのものを凌駕して私が尊重する良心、高潔、及び純真を冒瀆されるよりむしろ、私は一万回の死を望む」と。

エリオットの最大の苦悩は、この世に残すことになる妻のことであった。

エリオットが塔の窓の眼下に妻の姿を見つけた時、立ち止まり、帽子を振って叫んで曰く「愛する妻よ、先立つ私を許して欲しい！先立つ私を許して欲しい！---嵐のこの世にお前だけを残して逝くことを！」と。

彼が処刑台に向かっている時、群集の中の一人が叫んで曰く、「その処刑台は貴方の生涯で最も偉大な名誉の座である」と。

その言葉に対して彼は答えて曰く、「全くその通りだ！」と。

そして、彼はその言葉を大変喜んだのであった。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-5）

「**名誉**」について、新渡戸稲造曰く、

「人に笑われるぞ」「体面を汚すなよ」「恥ずかしくはないのか」などという言葉は過ちをおかした少年の振舞いを正す最後の切り札であった。

子が母の胎内にいる間に、その心があたかも名誉によってはぐくまれたかのように、この名誉に訴えるやり方は子供の心の琴線にふれたのである。

なぜなら、名誉は強い家族意識と結びついているので、真の意味では出生以前から影響を受けている、といえるのである。

バルザックは「家族の結束が失われると、その社会はモンテスキューが名づけた名誉という根本的な力を失ってしまう」といっている。

（出典：『武士道』、三笠書房、81 頁）

No.5 勇気（勇敢）と優しさ（思いやり）は共存できる！

勇気と優しさとは相容れないわけではない。

それどころか、温厚と優しさは最も勇敢な偉業を成した人々---そのうちの、

少なくとも女性たち---の特性を示すものとして知られてきた。

チャールズ・ネーピア將軍は弱い動物を傷つけるのに我慢できず狩猟を止めた。

彼の同朋であり（イベリア）半島戦争の史家であったウィリアム卿もまた同様の温厚で優しい性質が特徴であった。

ネーピア將軍が「勇猛で穏やかな気性の、インドの鹿毛馬のような人物である」と称したジェームズ・ウートレム卿もそのような人物であり---最も勇敢だが最も温厚な人物のうちの一人であった。

彼は女性を尊敬して礼儀正しく、子供に優しく、弱者が頼りにできる人であり、邪悪な者には容赦しないが正直者で助ける価値ある者には夏の日のごとく温かい思いやりを施す人であった。

その上、彼自身が青天白日のように正直で、その心は清廉潔白であった。

ウートレム卿については、フルク・グレヴィルがシドニーについて述べたことがそのまま真実として当てはまるだろう。

グレヴィル曰く、「シドニーは、占領、改革、入植という任務に適する真に価値ある人物の手本のような人である。

そうでなければ、一体、人類の中に、最も偉大で困難な行為と言えるものがあるだろうか。

彼が最重要とした目的は何にもまして彼の同朋の利益となることであり、彼の君主と祖国に貢献することであったのだから」と。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-5）

No.6 勇気・感謝・礼節・優しさが共存し得ることの一つの例。

平凡な兵士たちであっても、試練を受けたときには、温和な紳士に変わるのである。

アグラにおいては、多くの兵士たちが炎熱にさらされ、火傷を負った。

彼らは救出されて砦に入り、良家の優しい女性たちに看護されたのだが、そのとき、あの粗暴で勇敢な兵士たちが、あたかも素直な子供のようになった。

数週間もの長い間、とうとう一語もご婦人たちの耳を驚かすようなことは言わなかったのである。

さて重傷を受けた者は死に、生き残った兵士たちは疵が癒えたので、彼らは看護してくれた女性たちに感謝の気持ちを表そうと、タージという場所の美しい庭園に宴席を設けた。

その女性たちと、彼女らの夫たちを招いたのだが、たくさんの花が咲き、音楽が演奏される中において、あの普段は粗暴で全身に傷跡を残している兵士たちが起立して礼をし、病苦のときに介抱を受けたことを感謝した。

彼らのその優しい心が推しはかれるというものだ。

また、スクタリの病院においては、傷を受けた多くの英兵たちが、自分を看病してくれた女性たちを祝福したことも、同じく優しい心からであった。

中でもフローレンス・ナイチンゲールは慈愛の深い女性であり、礼儀正しく兵士たちの看護を管理したのだが、夜中に彼女が巡視するとき、その影が兵士たちの枕もとに映ると、彼らは痛みの我慢できない状態にあっても、彼女の影を祝福したという。

世の中にこれ以上に優しい心があるとは思われない。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

No.7 真に勇敢な行動は、愛情・思いやりから発せられる。

1852年2月27日、英国船のバーケンヘッド号がアフリカ沖で難破したが、そのとき、乗客らが英雄的な騎士道精神を表したことは真に誇らしいことである。

この船は、男子 472 人、婦女子 166 人を載せて、アフリカ海岸に沿って蒸気を吹き上げながら航行していた。

しばらくすると、船の底に激しく暗礁がぶつかって穴が開き、あっという間に浸水して沈んでしまうと思われた。

夜中の 2 時であったので、みな眠っていた。太鼓を叩き、歩兵を甲板に呼ぶと、閲兵式のときのように集まった。

さて、「女性と子供を救え」という声が聞こえたので、すぐ船底から部屋着のままの女性と子供たちを引き上げて、数艇の小舟に乗り込ませた。

これらの小舟がようやく本船を離れたとき、船の指揮官が浅はかにも「泳げる者はみな、海に飛び込んで、あの小舟に取り付け」と言ったが、ライト大尉が「だめだ、そんなことをしたら、あの女性たちを載せた船はひっくり返ってしまう」と言ったので、船上の人たちはみなじっと立って動くものはいなかった。

それ以外に余った小舟は一隻もなく、危険から逃れる望みはなかった。

しかしながら、人びとの心は平安で冷静であり、一つの恨みごとも聞こえず、大声を上げて泣くこともなく、祝いのかがり火を焚きながら、この一群の英雄たちは船と一緒に波間に沈んでいった。

ああ、このように勇ましく、しかも思いやりのある素晴らしい人びとの模範は、何世代もの未来にまで永く記憶されて滅びることはないであろう。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

さて、サミュエル・スマイルズが述べているように「勇気（勇敢）と優しさ（思いやり）は共存できる」ということ、いやむしろ、「優しさや思いやりを源として生じる勇気（勇敢）こそが真なる勇気（勇敢）なのである」とい方がより正確なのかもしれないが、新渡戸稲造も『武士道』の中で全く同じことを述べている。

やはり美德（道德）には、国家や時代を越えた普遍性があるようだ。

また勇氣（勇敢）とは決して「勇猛果敢な行為」のような動的現れのみを意味するのではなく、「何事によっても、心の穏やかさ平静さを保つ冷静沈着の態度」という静的現れも含んでいることを忘れてはならないであろう。

新渡戸稲造曰く、

慈悲が美とされたことはそれほど稀ではなかった。なぜなら、「もっとも剛毅なる者はもっとも柔和なる者であり、愛ある者は勇敢な者である」ということが普遍的な真理とされているからである。

（出典：『武士道』、三笠書房 52 頁）

「武士の情け」すなわち武士の優しさは…サムライの慈悲が盲目的衝動ではなく、正義に対する適切な配慮を認めているということを認めている。

（出典：同、53 頁）

4. 家庭（家）とは品性の学校である

人は誰しも人生の途上において、「自分は何のために生きているのだろう？」、「自分は何をして、何を目標に生きるべきか？」、「自分には何の才能があり、何を職業に選ぶべきだろう？」などと真剣に考え悩むものである。

しかし、**私〔＝ブログ作成者〕**の経験から言えば、これらの問い方には見かけ上重要な事実・内容が欠落しているように思えるのだ。

すなわち、人は皆、常に「単なる、〈個〉としての自分」ではあり得ず、必ず「妻（夫）をもつ自分」、「子供の親としての自分」、「家族の中の自分」、「父母、祖父母などの祖先と繋がっている自分」、「親

戚、友人、仲間、隣人、会社の同僚…等々と付き合いする自分」として、さらに言えば「同じ祖先、同じ歴史、同じ国法、伝統、習慣を共有している日本国民、日本民族の一員としての自分」なのである。

それゆえ、「何のために生きるのか?」、「何を職業とすべきなのか?」などの問いには、必ずこうした「多様で複雑な他者との繋がり（関係・連続）の中における自分は、」ということを踏まえて発せられているのだと認識しなければならないのだが、その事が忘れられがちなのである。

このことを裏返して言えば、そのような「多様で複雑な他者との繋がり（関係・連続）の中における自分」ではない、「全くの個（原子・アトム）となった自分（個人）」を想定するのでは、上記のような問いかけ自体がほとんど重要な意味を持たず、たとえこの問いに人間的な回答を与えたつもりでも、実際にはほとんど無価値なものになりかねないのである。

ここに、文明社会の人間の生に対して「中間組織」の果たす重要な役割があるだが、家庭（家）と家族は、最小単位の間組織であって、人間社会の核（基盤）なのである。

また、それは人々の生を、より高貴でより価値あるものとするために必要不可欠な「**礼節・知性・品性**」を育成してくれる学校なのである。

「**家**」と「**家族**」の役割について、**中川八洋**（筑波大学名誉教授、以下敬称略す）曰く、

家族から「解放」された子供とは、生物学的な親はあっても家族という血縁共同体を喪失するのであるから、まさしく「孤児」となる。

また、人間とは、父母だけでなくその両親〔祖父母〕そしてさらにその両親〔曾祖父母〕と連続する祖先の存在を認識することにおいて、人格（品性）の成長が期待される。

裏を返せば、家族が（夫婦〈親子〉別姓などの家族解体運動などにより）解体されれば祖先との連続をもたなくなるから、そのぶん「自分」が浮遊して人格は必然的に下降し徐々に人間性を喪失していく。

そればかりか、健全な家族が社会の基盤となっていない国家とは、全体主義体制以外ではそのような国家は運営できないから、自由社会であれば家族解体は、世代を経れば、国家解体に一直線につながるだろう。

さらに、倫理・道徳は、連綿と過去につながる伝統や慣習の土壌において生命を得て活きているものであるから、またこの民族の伝統と慣習は主として家族という場所において伝達されるものだから、家族の尊重なくして、倫理・道徳の存在もその発達もない。

家族解体は国家全体の倫理・道徳の解体となるのは不可避であろう。

（出典：中川八洋『国家が減じる---教育・家族・国家の自壊』、徳間書店、85頁）

No.8 家庭（家）は品性の学校である。

家庭は人生最初の、最も重要な品性の学校である。最善のものにせよ、最悪のものにせよ、すべての人が道徳訓練を受けるのは家庭においてである。なぜなら、家庭で教育された行動原則は人生を通じて持続し、人生を終えるまで止むことはないからである。

「礼節は人を育てる」とよく言われ、次には「知性は人を育てる」と言われる。しかし三番目に言われる「家庭は人を育てる」ということの中に最も真実がある。

なぜなら、家庭教育には礼節と知性の教育だけでなく、品性の教育も含まれているからである。

人の心が開かれ、習慣が形成され、知性が目覚め、品性が善くも悪くもなるのは、主として家庭においてである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-2)

No.9 家庭という学校が、子供の人生に大きく影響すると心得よ。

このように家庭は子供の養育の場であり、子供は家庭で成長して大人になる。

そして家庭は統治力に応じて善い場所とも悪い場所ともなる。

子供に対する愛情と義務の精神が家庭に行き渡り---家庭が知性と愛情でうまく治められ---家庭での日常生活が誠実で有徳に営まれ---家庭が思慮、親切、愛情により治められるならば、その時そのような家庭から健全で、有益で、幸福な人間が育つと期待できるだろう。

つまり、そのような家庭で育つ子供たちは、必要な能力を身に付けるにつれて、両親の歩みを辿り、正しい道を歩み、うまく自己を抑制し、周囲の人々の幸福に貢献できる大人になると期待できるのである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-2)

No.10 家庭の中での母親の果たすべき役割は極めて重要である。

次のように断言しても言い過ぎではなかろう。

すなわちそれは、幸福であるか不幸であるかの相違、教養があるか無教養であるかの相違、文明社会であるか野蛮社会であるかの相違は、非常に高い程度で、家庭という特別の王国の中の女性の能力に左右されるということである。

実際エマーソンは露骨だが正直に曰く、「善良な女性の影響力は文明化に関する一つの十分な尺度である」と。

子孫とは母親の膝の上にいる子供という形で我々の目の前にいるのだと言えるかもしれない。

その子供が最終的にどんな子供になるのかは、主に彼の最初の教育者であり、彼に最も影響力のある教育者である母親から受ける訓練と手本によって決まるのである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-2)

No.11 父母の子を思う心は、必ず報われることを知るべし！

子供の心に与えられた初期の印象が、子供に身勝手と不道德が介在する時期を経た後、熟年に達してから善行となって現れるという同種の事例がたくさんある。

両親が全力で自分の子供に正しく有徳な品性を育もうとしても、見たところ、その努力が無駄であったように思えることがあるかもしれない。

親の努力は川の中に投げ込まれて無くなってしまったパンのようにも思える。

そのように思えても、両親がこの世を去ったずっと後になって---それは20年かそれ以上の年月を要するかもしれない---幼少時に両親から教えられた善良な教訓、善良な手本がついに息子、娘たちに現われて結実するということが起るのである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-2)

No.12 女性の品性の墮落は、国を滅ぼす。

しかしその恐ろしい教訓は軽視されたので、フランスでは国民の忠実、克己、自尊---それらの徳は、全く家庭の中でのみ教育され得るものである---が欠如してしまった結果、何度も繰り返し、悲惨な苦しみを経験することとなった。

ナポレオン三世は、昨今のフランスの国勢の無さ、つまり無力で征服者に屈服している状態の原因は、国民の軽率さ、行動原則の欠如、及び享楽愛好にあると考えたと言われている---ただし、彼は自分自身もまた少なからずそれを助長したことを認めなければならないだろうが。

従って、フランスが善良で偉大な国でありたいならば、今後一層国民が学ぶべきことは、ナポレオン一世によって示されたこと---すなわち、善良な母親による家庭教育---のように思われる。

女性の与える影響力はどこの国でも同じである。洋の東西を問わず、あらゆる国の国民の道德、礼節、および品性は、その国で女性の置かれた境遇から影響を受ける。

女性の品位が墮落した国では社会の品位も墮落する。また、女性が道德的に清潔で見識を持つ国では、社会もそれに比例して高尚なものとなる。

だから、女性が教育されれば男性も教育されることになり、女性の品性が高められれば男性自身の品性も高められることになる。

女性の知的自由が拡大すれば社会全体の知的自由も拡大され保障される。

というのは国家とは家庭と、母親という種族とが産み出す成果に他ならないからである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-2)

No.13 父母の言行はすべて子供の成長に影響を及ぼす。

すなわち、父母は子供の成長を見て己の言行を常に三省すべし。

品行において模範を示すことは、たとえ大変些細なことであるとしても、決して軽んじていい加減にしてはならない。

なぜならば、これが常に他人の行状へと影響し、善であれ悪であれ他人にもたらすからだ。

父母が行う行動は、その子供も行うものであり、特に、父母の毎日の言行に表れる愛情や、守るべき規範、勤勉さ、そして自分の欲を抑えて身を修めることなど、一般にそのようなものは、子供がずっと後になってからも、自然と心に入り込んで忘れられるものではない。

耳から聞いたことはすっかり忘れ去ってしまっても、目で見えて習い身につけたことは、思い出してその通りにしようとする志がまた生れ出てくる。そこで、昔の賢人はよくわが子のことを「未来の自分」と呼ぶことがあった。

また、父母がただ無言のままでする行為であっても、父母が無意識に見せた姿であっても、たいていその子供の心の中に刻印され、生涯消え去ることがないのである。

ましてや、父母の善良な志や誠実な行為は、その子供の記憶に深く止まるものだ。

そのため、大人になってから汚れた考えに陥り、卑劣な行いを犯すことがあったとしても、夜中に夢から醒めて父母の姿を思い出すと、驚いて後悔し、悪い想念を拭き取るように取り除いて、行いが急に改善されることもある。

この事例によって、父母のお手本の影響力が遠い未来にまで及ぶことを認識すべきである。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-12)

5. 義務と克己について

No.14 ウェリントン、ネルソンのモットーは「義務」であった！

イギリスのウェリントンは、ナポレオンに比べてもはるかに偉大な人物である。

意志は強く、決然として粘り強いだけでなく、禁欲的で良心的であり、真に愛国的であった。

ナポレオンが求めたものは「栄誉」であり、ウェリントンはネルソンと同じく「義務」の言葉を自らの標語としていた。

ウェリントンの書簡の中に「栄誉」という言葉は一つも看られないが、「義務」の言葉はしばしば見られる。

しかしながら、大げさな公言によってその言葉を述べたことは一度もなかった。

最大の困難に直面しても泰然と立ち向かい、まったく怯んだり脅かされたりしなかった。

ペニンスラーの戦いで遭遇した困難は生半可なものではなかった。

他の人ならば、あるいは怒ってその任務を放棄し、あるいは気も狂わんばかりになったであろうが、ウェリントンは長くそれに耐え、注意深く考え抜いて困難に対処し、やがて大成功を収めた。

そのことは、ただ大将としての才智を示しているだけでなく、大政治家の器量を具えていることを十分に示している。

ウェリントンは怒りやすい気質の人であったが、自らの義務をよく果たそうとする志が強かったために、その怒りを抑えるべく努め、ようやく大変な忍耐力を生み出したのである。

また、彼の最も称賛すべきことは、まったく尊大な心がなく、金銭欲がなく、

下劣な執着心がないことである。

おそらく、大将としての旺盛な活動力と機敏さはナポレオンやクライブのようであり、政治家としての賢明さはクロムウェルのようであり、純粹で高潔であることはワシントンに似ている。

このように一人で多様な才能を具えている人物は、めったに現われない豪傑であると言えるだろう。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-8)

No.15 人を指揮する者は、自ら労苦を分かち合うべし。

ネーピアは、自分の部下たちを彼自身の英雄的精神によって鼓舞する正しい方法を知っており、それはつまり下士官の兵卒と労苦を共にすることであった。

そのため彼は、「人を指揮する王道は、公平に自分から労苦を分かち合うことにある。

戦いに勝とうと思うならば、大将たる者は全身全霊を戦闘に注ぐべきである。

困難がますます大きくなれば、ますます多くの労苦を引き受け、危険がますます大きくなれば、ますます強く勇気を示さなければならない。

そうやって困難や危険を圧倒すべきである」と言っている。

バローチーとの戦いやカッチー・ヒルズの戦いにおいて、ネーピアに従っていた、ある若い将校が言ったのは、「あの老人が馬上にあって少しも休まない姿を見ているのに、私のような若くて元気な人間がどうして怠けていられようか。

あの人の命令であれば、弾の込められた大砲の砲口の中にでも入ってゆける」ということだった。

ある者がこの話をネーピアに伝えたところ、ネーピアは「その言葉こそ、私の苦勞に対する十分な報償である」と言ったという。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-8)

いかなる国家（社会）においても、国防（国家の制度としての国防軍の設置、法整備を含む）は、国民の「生命／安全・私有財産・自由」を守護するために、国家（政府）・国民が果たすべき義務であり、それゆえ国防制度は“国家の法”である。

このことは、人類の長い歴史を顧みれば、否定できない事実である。

すなわち、不文の法であれ成文法であれ、国防という“国家の法”は「成文憲法の（法に反する）恣意的な条文・条項」より上位に存在するものとして尊重・遵守されねばならない。

私〔＝ブログ作成者〕は“真なる自由”と“自由の諸価値”を重視している者であるから、自由の諸価値を共有している、米国、英国、仏国・独国ほか EU 諸国、東南アジア・豪州の自由主義国家などとの国際協調／軍事同盟／集団的自衛を支持する立場を採る。

ゆえに、あらゆる国防政策の自由度を確保する（＝国家の法の遵守義務のための、あらゆる手段の確保可能性）という観点から、強固なる日米同盟の護持、集団的自衛権の行使容認論の立場を採る。

すなわち、**私〔＝ブログ作成者〕**は、親米親英自由主義者であり米国を敵視したり、日米同盟・集団的自衛権行使を否定したりするものではない。

しかし、そのような思想・主義の**私〔＝ブログ作成者〕**でさえ、現在の（戦後の）日本国民の「徹底した国防意識の欠如」、「祖国は

自らの手で守るべきものという義務感の喪失」「米国まかせの他力本願」の惨憺たる状態については、まったく弁護の余地がないほどまでに、日本国民が墮落してしまっていると断言せざるを得ない。

日本国民一人一人の国防義務意識の早急な覚醒が必要であるが、**私〔＝ブログ作成者〕**がこの小論『美德冊子2』を執筆した主要な動機の一つはここにあるのである。

しかし、一部の国家社会主義者ら（いわゆる反米保守派）らが掲げる「反米主義、国民統合、ナショナリズム、国民の独立性・自立性、国民自決権」等々の標語にカモフラージュされた「反米一辺倒の偏狭な国防論」と、真正の保守（自由）主義を標榜する**私〔＝ブログ作成者〕**の“自由主義国としての国防の義務”とは似て非なるものであることに、読者の皆様は十分に注意されたい。

その理由は簡単明瞭で、（国家社会主義的）反米保守派と**私〔＝ブログ作成者〕**とは、日本国が国防力を整え軍事的に自立できた後、国際社会の中で進むべき方向（目標）が、180度背反するからである。自明であろう。

また、反米保守派の多くは、人間が無知であるからこそ、それを補完し補助するために自生的に成長した、“自由の自生的秩序としての法”の概念がさっぱり理解できない。

だから、「法を支配する者が、世界を支配するのだ！」とか「人間の意思で経済を計画（統制）できる！」などの妄想（不可能）を平然と口にする。なんと愚かなことだろうか！

すなわち、彼らの言説は、彼らが法を全く理解できないことを宣言しているのであるから、彼らは自ら、国際法上の「国防（自衛）や国民自決権」と「侵略行為や他国民（民族）支配」の区別ができません！区別しません！と自白していることになる。

このように、彼らの唱える「反米主義一辺倒の国防論」とは、「国防」ならぬ、危険極まりない「対米戦争論（武装論）」と呼ぶべきものにすぎまい。

余談であるが、**私〔=ブログ作成者〕**は、攻撃的で危険な彼らのことを「ツマアカスズメバチ集団」とか「大スズメバチ集団」とかと呼ぶことにしている。

彼らの言論・礼儀作法には、武士道の美德など微塵もないし、彼らの思想は、共産主義やソ連（新ロシア）のメシアニズムに共感・共鳴する「アカい」思想に染まっているから、前者の呼称が最も適当であろうか。

さて、少々脱線したが、話を自由主義国家における、“国家の法”としての“正しき国防義務”に戻そう。

中川八洋／渡部昇一曰く、

中川：「美德」の体系は、日本の武士や英国の騎士の「武徳」において完成したことでわかり…武徳こそ美德です。

だから、現代にあっても、軍人とは、その国家とその民族の倫理・道徳を顕現する職業でありうるのです。その道徳を顕現することにおいて、軍人は特段の尊敬を国民から受けるのです。

『文明の衝突』で今は日本でも有名な、あのハンチントンが若い頃、その出世作『軍人と国家』（1964年）で次のように述べています。

「軍人…がなしうる〔国家・国民への〕最大のサービスは、自らに忠実であることであり、黙々として勇気をもって軍人としての努めを果たすことである。もし彼らが軍人精神を放棄するならば、彼らはまず第一に自分自身を破滅させ、究極的には彼らの国家を破滅させることになるであろう」。

〔出典：ハンチントン『国家と軍人』下巻、原書房、190頁〕

渡部：古今東西、“軍服を着た軍人”が存在することによって、国家・国民に倫理・道徳を喚起する機能を果たしてきたのです。しかし、戦後の日本は「軍人」を貶めることで、国全体からこの倫理・道徳を奪うことをしてきました。日本の左翼のなす、反軍・反軍備の運動の最も危険な性格は、それがこのように反道徳的だからです。

米国は国民あげて星条旗への忠誠といい、軍人を尊敬することといい、健全で正しい常識が溢れています。

(中川八洋／渡部昇一『教育を救う保守の哲学』、徳間書店、43～44 頁)

ここで、伊藤正徳『大海軍を想う』から、世界が称賛した軍人美德の一例を抜粋しておこう。

それは、日清戦争において、日本海軍連合艦隊司令長官・伊東祐亨中将が、清国北洋艦隊司令長官・丁汝昌にしめした武士道の礼節の一場面である。軍人美德の実例として引用しておく価値があろう。

伊藤正徳曰く、

伊東長官は、(清国北洋艦隊の) 名提督丁汝昌が自殺でもしては惜しいと考え、降伏させてわが国に亡命させようとした。そこで…(明治28年) 1月24日、長文の降伏勧告書を丁汝昌に送った。

書は、友情あふれると同時に、理義をつくして亡命再挙を諄々とすすめている。仏のマクマホンが普仏戦争に捕虜となり、のちに仏の政権を担当して国に報いたこと。また、トルコのオスマン・パシャがプレヴナの一戦に敗れてとられ、のちに帰って名陸相と謳われるに至ったこと。さらに日本の天皇陛下が、榎本武揚や大島圭介をゆるして重任につかせた実例を数え、すすんで、

「すなわち一艦隊を敵にあたえ、全軍をもって降るも、これを邦家の興廃に比すれば、まことに些々たる小節にして拘るにあたらず。ここにおいて僕は、世界に鳴る日本武士の名誉に誓い、閣下に向かって、しばらく我邦に遊び、他

日、貴国中興の気運が、閣下の勤労を要するの時節を待たれんことを願うや切なり。請う友人誠実の切言を聴かれよ」

と、本当に涙ぐましい真情の披瀝であった。

丁汝昌は部下を集めてこれを読み上げ、「伊東中将の友誼と真情とは感に堪えたるも、報国の大義は減すべからず。余はただ一死をもって臣職をつくすのみ」と、部下を戒飭して大いに防御をかためたのであった。しかしながら3週日を出ない間に、…敗勢が到来し、汝昌は万策尽き、(明治28年)2月12日、ついに、英艦隊司令長官を証人とし、人命保全を条件に、艦船砲台を献納する降伏書を提出するにいたった。そうして伊東がこれを許し、慰労に贈った葡萄酒のうえに涙をもよおし、「国家有事の際、これをも私受し得ざるを悲しむ」旨の一書を草し、その夜、薬を飲んで自殺した。

…威海衛港内の水兵たちを、ジャンクに乗せて(清国へ)帰国させる話になったとき、伊東長官は清国の軍使牛、程の両氏に向かい、「丁汝昌の柩はいかに輸送するや」とただしたところ、それも同じくジャンクにて送るつもりだという返事であった。

ここにおいて伊東は二人を睨んで言う。

「丁汝昌はかつて大艦隊を指揮し、久しく威名を東亜に謳われた北洋艦隊の司令長官である。もし、汝昌にして死処を得れば、その柩を護送するのは『定遠』か『鎮遠』でなければならない。いま戦に敗るといえども、その柩をジャンクにのせて運ぶとは何事であろう。それは仁義を主とし、士道を重んずる日本海軍軍人の見るに忍びないところである。貴君ら策なきや」

二人の軍使、面を上げずに伏す。そこで、伊東は語をついで、余は汝昌の英霊を慰めるため、貴艦隊の運送船「康済」号を捕獲せずに、とくに貴官に交付するから、それに提督の柩をのせ、余地があれば、兵員をのせてもよろしい、と宣した。軍使おどろいて座を立ち、三拝九拝して引き揚げた。16日「康済」号は、多数のわが軍艦に見送られ、半旗を掲げて静かに威海衛を去った。

伊東は前記勸告書の中で、「世界に鳴る日本の武士道」をみずから謳った。太平洋戦争の前ごろから、かなり剥げかけた武士道は、そのころ威海衛の沖に高々と波打っていた。いな、世界は間もなくこれを聞き伝えて、伊東提督の措置を世界海軍礼節の最高峰とほめたたえた。それはまた、わが国現代の礼節にも、なにものかを教えるごとくである。

(出典：伊藤正徳『大海軍を想う』、光人社 NF 文庫、127～128 頁)

No.16 克己心の鍛錬により得られる道徳的自由が人間の本質である。

克己心とは勇気が別の形態で現われたものにすぎない。

それは品性の主要な本質に当たると言えるだろう。

シェイクスピアが人間を「あと先を考える」生き物だと定義するのはこの性質があるからである。

克己心があることで人間は単なる動物と根本的に区別されるのであり、実際に、克己心がなければ真の人間ではあり得ないのである。

克己心はすべての美徳の根源である。

人を衝動と情熱の欲するままにさせれば、人はその瞬間から道徳的自由を放棄することになる。

人間は人生のある時期の流行に押し流され、当面最も強く欲求する事物の奴隷となるのである。

道徳的に自由であるためには---単なる動物以上の存在であるためには---人間は本能的な衝動に抵抗できなければならず、このことは克己心を訓練することによってのみ成し得るのである。

つまり人間の物質的生活と道徳的生活とを実際に区別するものはこの克己心の力なのであり、克己心は個人の品性を形成する主要な基礎となるのである。

No.17 美德とは自分が自分自身に課する自発的な義務の遂行のこと。

それは教育せねばならないものだが、強制するものではない。

不変の義務感はまさに品性の王者である。

義務とは最も高貴な態度で人類の法を守ることを言うのである。

義務感がなければ、人は困難や誘惑の最初の一吹きの下でよろめき墮落してしまうのである。

その一方で、義務感による刺激を受ければ、最も弱い人でも強くなり勇氣に満ちるようになるのである。

ジェームソン女史曰く、「義務感は、道徳体系全体を結合する接着剤である。

それがなければ、能力、善良、知性、真実、幸福、愛情のすべてが、永続性を保持できなくなるのである。

しかし、人は、自分の生存の基礎構造のすべてが足元から砕け散り、ついには廢墟の真ん中に投げ出されるに至って初めて、自分の道徳心が荒廢していたことに気づき、驚くものなのである」と。

義務は正義に基礎を置いており---正義は愛情に刺激されて善の最も完全な形態となる。

義務とは一時の感傷ではなく、生涯を通じて充満する原理である。

義務は、主に人の良心と自由意志によって選択される振る舞いと言動の中に現れるものなのである。

6. 忍耐と勤勉について

No.18 失敗は成功の母…(1)

努力・忍耐・志気

偉大な事業を成し遂げるために奇抜な方法があるわけではなく、また天才的な能力を必要とはしない。

それはありふれた努力によって得られ、また平凡な資質の人によって成し遂げられるものである。

なぜなら、細心の注意を払えば、目の前にある日常のことがすべて良い経験となり、それによって理解が進み、発明や発見などの結果を得ることができるからである。

また、失敗をしても、真に勤勉な人はそこから勇敢な精進のための力を引き出し、自然と自己改革の機会となるのである。

一步一步実際に経験を積んで、善行を行うことによってこそこそ、人は平安に毎日を過ごせるのである。

最大限の忍耐をし、本気の志気を持つ人は、最大限の功績を遺すことができるのだ。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-4)

No.19 失敗は成功の母…(2)

希望・自尊心・義務感

自己鍛錬と自己抑制の二つは実践知の基礎であって、その根は自尊心から発していなければならない。

希望は自分を敬うところから生れ出るものだ。希望は力の友であり、成功の母である。

思うに、希望の強い人は、その内に奇跡という能力を秘めているのだ。

最も身分の低い人であっても、こう言うべきである。

それは、「他の人びとと共に仕事に励み、自分の身体や自分の心を汚さず傷つけないためには、社会全体の力がなくてはならない。しかしながら、自分の心を尽くし才能を発揮して、自分がやらなければことを十分完全なものにすることは、自分自身の義務である。

私はただ悪を戒めて行わないだけでなく、自分の本質に具わった善良なる資質を目覚めさせる努力をしなければならない。

私が自分を敬い、また他人を敬うことは、私の当然の義務であって、他の人が私を尊敬するのは、その人の当然の義務である」ということだ。

思うに、法とは、こうして人が互いに尊敬しあい、道徳心をもって対処する規則を記録したものにすぎない。

(出典 : Samuel Smiles," Self Help",CHAPTER-11)

No.20 失敗は成功の母…(3)

希望、努力、失敗、落胆、忍耐、向上、希望…の反復は、巨大な成功エネルギーとして蓄積され、いつか歓喜の花と咲く！

名将と称えられる人は、しばしば敗北することによって兵法の進歩を可能としたのである。

思うに、敗北から学ぶことが勝利から学ぶことよりも多いためである。

ワシントンは、一生の間を通じて、戦場では敗北することが勝利することよりも多かったが、最後にはついに成功を収めたのである。

昔、ローマの有名な将軍たちが大勝利を収めた戦いも、その始まりには必ず敗北していた。

モロー〔フランスの有名な将軍〕は戦うたびに敗北していたので、友人たち

は彼を太鼓に譬えて悪口を言っていた。

「彼については敵に“打たれた”という話しか聞こえない」という意味らしい。

ウェリントンは将軍として智恵があり、軍事的天才であるが、最も手ごわい敵に遭遇し、耐えがたい困難を耐え忍んだからこそ、その根性を鍛えて能力を伸ばし、ついに最高の功績を上げ、名将と称えられるようになったのだ。

また、航海技術に長けた水夫は、頻繁に遭遇する暴風の危機をしのぐことによって、自己信頼の力を身につけ、勇気を養い実践力を伸ばすのである。

従って、イギリス海軍の男は世界に比べるものがないと称えられるが、それはまさに、イギリスを取り囲む荒々しい海と寒い夜によって最良の教えを受けた結果なのだ。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-11)

No.21 働くことは人生の重荷なのか？それとも、名誉や誇りなのか？

仕事は実践的な品性を育成するための最善の教師である。

仕事をすることで我々は従順、克己心、注意力、適応力、及び忍耐力が呼び起こされ、自己管理ができるのである。

そして仕事は、その人特有の天職を行うための熟練と技術と、日常生活の事柄を行うための適性と器用さとを人々に付与するのである。

仕事は人類の法---人々と国家を発展させるのに有効な原則---である。

生きるために必要不可欠であるため、より多くの人が自分の手を動かして働かなければならない。

しかし、もし自分の望むとおりの人生を楽しみたいと思うならば、人は皆、何らかの形で働かねばならないだろう。

労働することは重荷を負わされ罰を与えられることのように感じられるか

もしれないが、労働することは名誉なことであり、誇るべきことでもあるのだ。
労働せずには何事も成就し得ない。

人類の偉大性はすべて労働から生じ、文明社会とは労働の産物である。

もし労働がなくなれば、アダム種族（勤勉な人間）は、即座に道德上の死亡状態に陥るだろう。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-4）

勤勉と自助の精神の重要性については、**私**〔=**ブログ作成者**〕の
以前の小冊子（小論）、

・[『美德冊子「さあ、自助の精神を取り戻そう」』](#)

に詳しく述べているので、興味ある方はそちらを読んで頂きたい。
ここでは、国民の勤労の義務と自助の精神を阻害し、国家財政を不可避的に破綻させ、そうなってから、数名の政治家や官僚が頭を下げて、

「福祉制度は破綻しました。すいませんでした。もう集めるお金も、配るお金もありませんので、福祉制度は終了です。どんなに批判を受けても、無いモノはないのですから終了です！」

との一言ですべてが終わるであろう「福祉国家」について、**ハイエク**と**トックヴィル**の批判を引用しておくに留めたい。

「福祉国家」支持者からは、「そんなことは、ありえない！」という批判が聞こえてきそうだ。

だが、**私**〔=**ブログ作成者**〕は良識ある読者の皆様に、こう問うてみたい。

「あなたは、国の（福祉）官僚や国会議員がそんないい加減なことをやっているはずもないし、将来にもそんな出鱈目をしなくてよいように計画的に物事をすすめているはずだ！と確信・信用できま

すか？

あるいは、彼らを信用しない方が自分のためだと思いますか？」と。

前者だと答える人びとは、＜ギリギリスのようにのんびり＞暮らせばよい。

後者だと答えざるを得ない人は、＜アリのように勤勉・努力して＞自助の精神と実力を貯えて（養って）おく必要があるだろう。

このように、将来の予測の仕方には楽観と悲観の2通りがある。

しかし、今後やってくる現実には1つしかない。

さて、どちらだろうか？

ハイエク曰く、

この制度（福祉国家）のもとでは、各世代がその先行世代の必要とする支払いによって、後続世代の援助にたいして同様の請求権をもつのである。

このような制度は一度取りいれられてしまうと、永久に存続しつづけねばならないか、あるいは完全に崩壊にまかされることになるかのどちらかであろう。

それゆえ、そうした制度の導入は発展を拘束することとなり、社会の負担を次第に増加させ、その負担からまぬがれようとしてインフレーションをいく度も繰り返すことになるのが落ちであろう。

このはけ口にせよ、あるいはすでに負っている責務の故意の不履行にせよ、堅実な社会を支える基盤を生み出すことはできない。これらの問題について分別をもって解決を期待できる以前に、民主主義は自らの愚の代償を支払わなくてはならないこと、そして、その今日の問題を解決するために、将来無限に手形を振り出すことができないことを学ばなくてはならないだろう。

（出典：『ハイエク全集Ⅰ-7「自由の条件〔Ⅲ〕」』、春秋社、70頁）

トクヴィル曰く、

この人間集団のうえには、一つの巨大な後見者的な権力がそびえ、それだけが彼らの楽しみを保障し、運命を見守る任を自ら引き受ける。

その権力は絶対的で、微細にわたり規則正しく用心深くかつ柔和である。それは親の権威のように見える---もしもその目的が親の権威のように、人間を大人に育てることであるとするならば。

しかし、この権力は正反対に人間を永久に子供の状態にとどめておこうとする。

人びとが楽しむことしか考えないとすれば、確かに楽しむことで足りるであろう。

このような政府は喜んで彼らの幸福のためにつくすが、ただその唯一の引受機関でありそしてその幸福の唯一の決裁者であろうとする。

それは人びとの安全を保障し、欲求を予見し、それを充足し、彼らの快楽を助ける。彼らの主要な関心事を管理し、産業を監督し、相続を規制し、遺産を分割する。

国民から考えることの煩わしさと生きることの面倒のすべてを取りのぞくようにしてくれるとき、いったい後に何が残るであろう。

(出典：トクヴィル『アメリカの民主政治〔Ⅱ〕』、講談社文庫、318 頁)

No.22 怠け者は、言い訳する時間を惜しんで働くべし！

怠惰は常に言い訳に満ちているものだ。

怠け者というのは、仕事をする気はないのに、屁理屈を言うのには活発であることが多い。

(怠け者) 曰く、「通り道にライオンがいるので通れない」、「その山を登る

のは無理だ」、あるいは「努力しても無駄だ---かつて、それをしようと試みたが失敗したので、私にはできない」と。

このような言い訳としての屁理屈に対し、サミュエル・ロミリー卿はかつて若者向けの書物を書いて曰く、「諸君の怠惰と時間の浪費に対する私の批判はとてもし生懸命に書いたものである。

実際に言いたいことはこういうことなのだ。

すなわち、諸君は自分の怠惰を正当化するために興味深い言い訳をすけれども、そのことから導ける結論はただ一つだけだ。

それは、諸君は言い訳をすることに時間を浪費してしまい、仕事に対する努力不足が習慣となってしまうということである。

諸君の論理は次のようなものだ。

すなわち、どんな人でも仕事をうまくできるならば、それはその人にその素質があるからであり、もしある特定の個人が仕事をうまくできないならば、その素質がないからだ、というものである。

諸君が字を書かないのは、字を書けないからであり、やる気の不足は、才能の不足を示しているというのである。

これはなんと立派な流儀であろうか！---もしそんな流儀があつて、広く受け入れられても、どんな有益な効果が生じるだろうか！

昔から正しく言われてきたことはこうである。

すなわち、努力してもものを獲得する困難という重荷を背負うことをせずに、ものを手に入れたいと望むのはその人の弱さの象徴であるということだ。

また同様に、対価を自分で支払って得られるものだけが所有する価値のあるものだと知ることが、自分の実力をつけるための最高の秘訣なのである。

もし努力によって勝ち取らなければ、人は余暇さえ楽しむことはできない。もし仕事をせずに余暇を得ようとしても、余暇の代金は支払えないからだ。

(出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-4)

No.23 富を築くために必要なことの本質は、古今東西変わらない。

世間に流行する書物の中で、金を貯えて富を築くための秘訣を広く大衆に知らせるものは少なくない。

しかし、どの国においても、古くから言い伝えられている諺が証明していることには敵わないのである。

例えば「ペニーを大切にせよ。そうすればポンドが面倒を見てくれるようになる」、「勤勉は幸運の母である」、「苦勞なければ儲けなし」「汗をかかなければ旨味は得られない」、「働け、さすれば必ず得るものあり」、「世界は忍耐と勤勉の人のものである」、「借金を負って目覚めるよりは、むしろ夕食を食べずに寢床に入るべし」、等々である。

これらの諺は、昔、文字がまだ発明されていない時代に、経験を重ねた知識豊富な人の口から発された正論名言であり、多くの世代を経て試されながらも、的確で誤っていないため今日まで伝わってきたのである。

『旧約聖書』のソロモン王は古代の賢人であるが、彼の箴言の中でも、勉強の徳と金銭の使い方について言及したものは智恵に満ちている。

たとえば、「仕事を怠ける人は、無益に財産を浪費する人の兄弟である」、「蟻を観察してみよ、夏に食糧を貯え、取入れの時期に物を収穫している。彼らの智恵を手本とせよ」、「貧乏になることは、旅人よりも速く、兵士よりも迅速である」、「勤勉な人の手は富を創り出す」、「神を信仰することは智慧の本源である」、「賢明な人間となろうと志せ。智恵は金銀より求められるべきものであり、宝石よりも貴く、世の中でそれに比べられるものはない」、などと述べられている。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-10)

7. 良き仲間と交際し、優れた手本を学ぶことが大切！

No.24 良き仲間と交際せよ！

「人の品性は、交際している仲間を見ればわかる」という諺がある。

しらふの人は自然と酔っ払い人とは交際しないものである。

同様に、品行正しい人は自堕落な人とは交際しないものである。

品行正しい人は自堕落な人とは交際しないものである。

邪悪な人と交際する行為は、その人の趣味が低俗であり、性質が劣悪なことを示しているのである。

そして、そのような劣悪な集団と交われば、必ず自分の品性を低下させることになるのである。

セネカ曰く、「劣悪な人々との交際は極めて有害なことある。なぜなら、たとえそれが我々にすぐには害を与えずとも、我々の心に有害な種子を蒔き、その種子は我々が交際相手と別れた後も我々に付いて来て---将来再発して、必ず大災難を引き起こすからである。」と。

(出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-3)

No.25 良き手本から学べ。

確かに、我々が周囲の人と交際すれば、必ず品性を形成する過程で強い影響を受けるものである。

なぜなら人は模倣する本性をもっており、すべての人が多かれ少なかれ、仲間の話し方、礼節、歩き方、身ぶり手ぶり、及び思考の習慣まで影響を受けるのである。

バーク曰く、「手本は何もないだろうか？そうではなく、すべてが手本なのである。手本は人類の学校であり、人類はそこから学ぶ他ないのである」と。

バークの偉大な座右の銘---バークがロッキンガム公爵の額石に書き留めた

ものである---を我々は復唱する価値がある。

それは「記憶に留めて、模倣し、その目的を貫くこと」というものであった。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-3)

No.26 優れた人の安楽な経験よりも、苦難の経験から多くを学べ。

他方、人は自分より賢明、善良、そして経験豊富な人と交際する時には常に、多かれ少なかれ、奮起させられ元気づけられるものである。

彼らは我々自身の人生経験を高めてくれる。

我々は彼らの経験に基づいて自己評価を修正し、彼らの智慧の共有者となる。

我々は彼らの眼を通して観察の領域を拡張、彼らの経験から恩恵を受け、我々は彼らの楽しい経験からだけでなく---それよりもっと有益な---彼らの苦難の経験からも学ぶのである。

もし彼らが我々より活力的ならば、我々はその活力を共有できる。

だから賢明で活動的な人々と交際すれば必ず品性の形成において最も価値ある影響を受けるのである。

---つまり、自分の資質を増大させ、意志を強くし、目的を高尚にし、そして仕事をより優れた器用さと能力で行い、より効果的に他者を助けることができるようになるのである。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-3)

No.27 言行の誠実さは、人間品性の支柱である。

身体に背骨があるのと同じく、言葉の誠実さ、行いの誠実さがなければ、品格は立つことができない。

昔、ロバート・ピール〔イギリスの宰相〕が亡くなって数日後、ウェリントン

ン公爵が上院議会でピールの並外れた品格を称えたその演説は、内容も表現も共に素晴らしいものだと言わなければならない。

ウェリントン公爵はこう言った、「この上院にお集まりの諸君は、みなロバート・ピール君の品格が、尊び敬意を表すべきものであったことを記憶してほしい。

私は長い間、彼と議事堂にあって職務を共にし、また光栄にも、私邸において彼と親交を結んでいたのです、彼の人となりを知っている。

彼と過ごした時間をよくよく振り返ってみると、彼の言行は誠実で公正であり、未だに彼以上に深く信頼できる人物に出会ったことはない。

また、国中の人々のために心を尽くし、彼らが幸福になれるよう努力することにおいて、彼に優る人物に未だに出会ったことがない。

彼と互いに言葉を交わし合ったことを振り返ってみても、彼が真理をゆるがせにするのを一度も見ることがない。

また、事実であると自分が信じることができないものについて、彼が口に出したことは一度もなかったのである」と。

思うに、それほどピールの心が高尚であり言行が誠実であったために、その感化が広く他人に及び、自然と威力を発揮して世間から尊敬されることになったのである。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

No.28 Gentlemen の意義は、その道徳的価値の中にある。

真のジェントルメン〔紳士〕は、最高度の模範をもって自分の身を創ってゆくものである。

昔から、身分が高く権勢のある人のことを「ジェントルメン」と呼ぶのである。

「ジェントル」は、温厚、和平、善良、上品、などいくつかの意味を含んだ言葉であり、「メン」は人という意味である。

身分の高い人は徳もあることが多いという理由から、この身分の高い人の通称として使う言葉になったのである。

昔のフランスの将軍が、自分の率いるスコットランド人ジェントリ〔郷紳〕の連隊に言い聞かせて、「紳士の品格とは、この世での身分によるのではなく、それとは別に威厳があって、自然と、他人から尊敬されるようなものなのである。

ジェントルメンが尊敬されるのは、見た目ではなく道徳的価値によるのだ。その人が所有している財産ではなくて、小さな心によるのだ。

昔の詩人は、紳士の徳について『正直であって義を行い、心中の真実から言葉を発する』と述べたのだ」と語った。

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

良き仲間と交際し、優れた手本を学ぶことが大切なのは、個人間の関係に限らず、国家間の関係にもそのまま当てはまる。

例えば、「条約に忠実な友邦は持つべきである」の事例として、日露戦争における露国バルチック艦隊の大遠征に際し、同盟国英国が戦時国際法の下、我が国に与えてくれた絶大な援助について記述しておく価値があると思われる。

伊藤正徳曰く、

航程 1 万 8 千カイリ、その間に 1 カ所の根拠地もないロシアが、平時なら問題はないが、戦時国際法の嚴重に実践される環境の下でかかる大艦隊を極東に送るのが、いかに難事業であるかは、今日から考えても十分に理解される。

…戦いの神は早くもロジェストウェンスキー（提督）を見捨てるような形相を呈しはじめた。…出航 7 日目の夜半、北海ドガー・バンクにおいてハルの漁

船群を、日本の水雷艇と誤認して砲撃し…日本の同盟国イギリスは、合理的に盟邦援助の手をさしのべるがごとく、輿論はこの艦隊を、「狂犬艦隊」「公海の海賊隊」と呼び、議会は「司令長官の本国召喚を要求すべきこと」を政府に警告し、政府は露国に対し、国旗の侮辱に対する賠償と、溺死者放棄に対する現場パトロール艇長の処罰を要求し、同時にその世界的言論機構は、反ロシアの感情を、中立国の全体に向かって注入するように動員された。

第一寄港地スペインのヴィーゴに入るや…24 時間後の出港を要求される羽目となった。

1 万 8 千カイリの海上は、大部分、イギリスの勢力圏内にあり、わずかにマダガスカル以下、1, 2 のフランス領であったが、それもイギリスが厳しく睨んでいるので、好意の中立以下の援助はさしひかえるほかはなかった。

フランスは同盟国ロシアを助きたいのは山々であったが、一歩出すぎて、日本の同盟国イギリスと対立しては大変だから、人目につくところでは気の毒なくらい遠慮をした。

例えば、仏領カムラン湾における措置のごとき、そこでロシア艦隊は、本国からの増援部隊を 1 カ月も待った間、心にもなき「3 カイリ領海外停泊」や「石炭供給拒否」の中立主義を実践し、艦隊の大切な最後の休養も与えなかったのである。その間、日本の外務省は、中立違反と疑われる一切の行為に対して、フランス政府に厳重な警告を送ること数回。もし背後に英国がなかったら、怒鳴り返されるような執拗なる抗議を続けて、ついにバ艦隊への利益供与をほとんど完全に阻止したのであった。

それよりも、艦隊将兵の意気に直接不良の影響をおよぼしたのは、スペインからタンジールに向かう航路において、イギリスの巡洋艦戦隊の演習を 2 日間見せつけられたことであった。…あたかも、「海軍とはこんなものだ。死出の旅路に見ておけ」といわんばかりに示威を続けた。公海の演習であるから文句はない。

…それだけではない。バルチック艦隊の内容細目と行動に関する情報は、いちいち合法的に日本に伝達され…日本自身の手ではどうにもならない敵艦隊の行動をイギリスの好意によってことごとく知ることができたのだ。友邦は持つべきものだ---ただし条約に忠実なる---という一事は、この重大なる歴史とともに変わらないであろう。

(出典：伊藤正徳『大海軍を想う』、光人社 NF 文庫、228～231 頁)

No.29 自分の品性の価値を尊ぶ者が、他者を真に尊敬できる者である。

紳士は必ず自分自身を尊敬する。

すなわち、自分の品格に価値を置き、それを尊ぶのである。

これは、他人に見られるから品格を身につけるというのではない。

自らの心の眼によって自らの誤りを正し、自らの本心がよいと許可したものを言葉にして発するのだ。

また、紳士は自分で自分自身を尊敬するからこそ、それと同じ原理によって他人を尊敬する。

紳士は仁徳を神聖なものと考え、これを常に意識しているため、他人と接する場合にも十分な礼儀をわきまえている。

他人の誤りを寛容に許し、他人の困窮をよく憐れむのである。

(出典：Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

No.30 偉人の高貴な品性は永遠の遺産であり、未来への羅針盤である。

人は自分がどのように生き、何をするのが最善であるかを偉人の伝記の中の教訓から学ぶものである。

そうすることで、人は皆新しい能力と確信を得ることができる。

最も低い地位の人でさえ、最も偉大な人の伝記を見るだけで、それを称賛し、希望を持ち、勇気を出すことができる。

我々と同じ家系と血統を持ち、一つの普遍的生命を生きている、これらの偉大な同朋は、今でも墓石の下から我々に語りかけ、彼らの歩んだ道に我々を招き寄せる。

彼らの手本は今でも我々と共にあって、我々を導き、影響を及ぼし、そして道案内をしてくれる。

なぜなら、偉人の高貴な品性は永遠の遺産であり、代々生き続けて、絶えず同様の偉人を再生させるのである。

孟子曰く、

「孟子は云った。

聖人は百世の師である。

柳（下恵）の風を聞けば、軽薄なる者も敦厚となり、根性卑しき者も寛大となる」と。

（『孟子』「尽心下-15」）

つまり善良な人が歩んだ人生は、その継承者すべてにとって自由と解放の福音であり続ける。

詩に曰く、「我々が遺すものが子孫の心の中で生きている限り、我々に死はないのである」と。

善良な人が述べた金言、示した手本はあらゆる時代を乗り越えて、後継者の思想と感情とに受け継がれ、彼らを人生の途上で助け、そして彼らが死に臨んだ時、それが心の慰めとなることが多いのである。

英連邦の人であり、獄中で亡くなったヘンリー・マーチン曰く、「最も悲惨な最期、最も苦痛の死でさえも、有意義に費やされた人生の追憶に比べれば何でもない。

そして、偉大な人物とは、ただ単に、このような教訓や手本を後継の子孫に

遺す輝かしい榮譽を得ることができ人物のことを指して言うにすぎないので
はなかろうか！」と。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-3）

伊藤正徳曰く、

満 50 年前の（1905 年）5 月 27 日、わが連合艦隊はロシアの海軍を滅ぼした。
日本海に現われた 36 隻の艦隊のうち、わずかに仮装巡 1、駆逐 2、特務 1 が
遁走したのみで、他の主力全部を撃沈または捕獲した。わが方の損害は水雷艇
3 隻のみであった。かかる大戦勝は世界の歴史にない。

…（日本）国民は、永く東郷（平八郎）に感謝すると同時に、その艦隊を築
き上げた我々の先祖に対しても感謝しなければならない。イギリスは、10 月
21 日をもって、「トラファルガル・デー」と定め、ネルソン提督に国民的感謝
を捧げる行事を 150 年も続けていること前述のごとく、日本も、5 月 27 日を
「海軍記念日」と定めて、回顧と感謝の行事を続けること約 40 年におよんだ。

昭和 20 年、いったん戦さ敗れるや 5 月 27 日も、東郷も、旗艦「三笠」も、
一挙に消えてしまった。これは、まことに嘆かわしい国民の取り乱し方である。
敗戦も歴史であるが、大戦勝も歴史である。しかも、おそらくは国民最大のプ
ライドに値する歴史である。それをみずから焼却してしまうのは、独立国民の
意識と相容れない卑下敗退の思潮にあるものと思われる。正さねばならない。

（出典：伊藤正徳『大海軍を想う』、光人社 NF 文庫、293～294 頁）

8. 個人の品性とは、金銭や特権で買えない“人間の質”である。

No.31 品性は日常の平凡な行為の中に最もよく現れるもの。

アボット博士---彼はのちにカンタベリー大主教となる人物である---は、今
は亡き友人トマス・サックヴィルの人物像について語る時、彼の政治家として

の功績や詩人としての才能について語るのではなく、日常生活における職務に関する一人の人間としての彼の美德に重点を置いて語ったものだ。

博士曰く、「彼の日常生活の中に他の者より珍しいものがどれほどあっただろうか！彼ほど妻をよく愛した者がいただろうか？彼ほど子供をかわいがった者がいただろうか？彼ほど友との友情の絆を固くした者がいただろうか？彼ほど自分の敵に対して寛容だった者がいただろうか？彼ほど約束をよく守る者がいただろうか？」と。

実際、我々が一人の人間の真の品性をよりよく理解して評価しようとするなら、著述家、弁論家あるいは政治家としての彼の公的能力の発現を見るよりは、最も親しい人々に対する振る舞い方や、一見平凡に見える日々の職務のやり方一つ一つを見るほうが良いのである。

(出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-1)

No.32 美德とは、法と秩序の遵守のための羅針盤である。

(真実、誠実、率直を遵守する) 原則がなければ、人は舵と羅針盤のない船舶のごとく、吹く風に任せてあちこちを漂うしかない。

そのような人は法なき人、規則なき人、秩序なき人、統治なき人と言えるだろう。

ヒューム曰く、「道德原理は、社会的かつ普遍的なものである。道德原理は、人類共通の敵である悪徳と無秩序に対して、いわば、人類の党派というべきものを形成するのである」と。

(出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-1)

No.33 智恵が人を善良にし、善が人を智恵ある存在にする。

日常生活や商売の事柄において、知性は品性ほどに役に立たず---知力は感情ほどに物言わず---才能は自制心、忍耐力及び分別によって抑制される規律ほどには役に立たないものである。

だから、私的、公的生活の要求に対しては、公正さの度合いに起因する相応量の通常の良識をもって備えるしかない。良識は、経験により訓練され、善によって感化されれば、実用的な智恵となる。

実際に、善はある程度の智恵を含んでおり---それは、最も崇高な智恵であり---世俗的な智恵と神聖な智恵を統合した智恵なのである。

ヘンリー・テイラー卿曰く、「智恵と善との調和には多様性がある。そして両者が互いに付随して存在することは、智恵が人間を善良にすることのみならず、善が人間を智恵ある存在にすることからも疑いないことなのである」と。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-1)

No.34 品性の保持には、常に鍛錬が必要である。

しかし、最善の品性は努力しなければ形成されない。

油断大敵を心がける訓練、自己修養の訓練、及び自制心を養う訓練が常に必要なのである。

それには多くの行き詰まり、つまずき、及び一時的な失敗が伴うかもしれない。

また、戦って乗り越えようとしてもうまくいかない困難や誘惑があるかもしれない。

しかし、もし気力を強くして気持ちを誠実に保つならば、誰も失望する必要などなく、最終的には成功するだろうと期待すべきである。

これまでに成し得たよりも高い品性の水準に到達するために、前へ進もうとする努力こそが、人の心を奮い立たせ元気づけるものなのである。

そして、たとえ（すぐに）目的を達成できなくとも、品性の高みに向かってなされる誠実な努力のすべてが、努力する者の品性をより良くしてくれるのである。

（出典：Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-1）

No.35 真なる賢者が口を開く時、その相手は「超・愚か者」だということ。

人の個人的幸福のためには、行為だけでなく言葉にも支配力を行使できなければならない。

なぜなら言葉は暴力を振るうよりもずっと強く人に打撃を与えることがあり、実際には何も使わなくても、口から短剣を放つこともあるからだ。

フランスの諺に曰く、「言葉の一撃は、槍の一撃よりも悪い」と。

口から出そうだが、もしそれを言ってしまえば、相手を大変困惑させるような辛辣な言葉がある。

そのような言葉がしばしば口から出てしまうのを抑えるのが何と難しいことであろうか。

ブレーメル女史曰く、「神は、家の中では、我々を言葉の破壊力からお守り下さる。言葉には鋭い剣以上に胸を引き裂くものもある。その尖った剣先が一生を通じて相手の心を傷つけるような言葉もある」と。

人の品性は、他のどのような行為の中に表れる場合と同じく、話し言葉を自制する行為の中にも表れるのである。

賢明で我慢強い人ならば他者の気持ちを犠牲にして生意気なことや手厳しいことを言いたい気持ちを抑えるだろう。

一方、愚か者は心に思うままに口走り、自分の言葉を抑えるよりむしろ相手

の気持ちを犠牲にするだろう。

ソロモン曰く、「賢者の口は心の中にあり、愚者の心は口の中にあるものだ」と。

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-6)

● まとめ

- ・ 国民が品性を維持しようとしないとすれば、その国家は滅亡寸前へと近づく。
- ・ 国民全体が、名誉、秩序、従順、貞節、忠誠の美德を過去の遺物に過ぎないと思うとき、国家は滅亡に至る。
- ・ 救済方法は唯一つ、国民各々が品性を回復すること！

(出典 : Samuel Smiles, "CHARACTER", CHAPTER-1)

さて以上で、今回の**私**〔=**ブログ作成者**〕の『**美德冊子 2**』「日本国民の品性は蘇生できるか？ ---新渡戸稲造『武士道』の遺産を蘇生せよ！ ---」を終了したいと思う。

概ね、**私**〔=**ブログ作成者**〕が読者の皆様に伝えたいことは盛り込んだつもりであるが、唯一の心残りは、躰（礼儀作法）すなわち立居振舞および言葉遣い（敬語）を盛り込む余力がなかったことである。読者の皆様におかれては、どうぞお許し頂きたい。

この躰（礼儀作法）については、次回、（仮称）『**美德冊子 3**』を書く機会があれば、その時にぜひ盛り込みたいと考えている。

最後に、この『**美德冊子 2**』が、様々な読者の皆様（老若男女かわらず）の、これからの人生にとって僅かでも前向きかつ良い方向へ進むきっかけとなることを切に願いつつ、**サミュエル・スマイ**

ルズ『自助論』から引用して締めくくりたいと思う。

国を興し、国を強くし、国を尊いものとして、国威を遠くまで及ぼし、国の善き風俗を生み出し、数百万の心を従わせ、傲慢な外国を屈服させるのは、真の王権、真の王冠、真の王笏である。この貴族の地位は、世襲ではなく、身のこなしによるものではなく、また才能によるものではなく品格によるものである。品格は人間の真の爵位である-----タイムズ紙

(出典 : Samuel Smiles, "Self Help", CHAPTER-13)

【関連ブログ等リンク】

→ [中川八洋掲示板](#)

→ [Edmund Burke \(エドマント・バーク\) の系譜 HP](#)



平成 26 年 10 月 16 日 (木) 兵庫県神戸市にて記す

by E・Burke を信奉する保守 (自由) 主義者
